

国語

第2問 問4

複数の文章を関連づけて考える設問で、各学力層で差がついた

第2問 問4

正解率	59.8%
SS70~75	97.6%
SS65~70	94.2%
SS60~65	88.9%
SS55~60	80.3%
SS50~55	69.2%
SS45~50	54.5%

2021年度第1回ベネッセ・駿台
大学入学共通テスト模試

「国語」	
受験者数:	367,981人
平均点:	103.3点
標準偏差:	33.1

問4 傍線部C「発語と失語のあいだの住還」とあるが、「文章Ⅱ」も踏まえて考えたとき、詩に対する石原吉郎の作法はどのようなものと言えるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① つねに「詩とは何か」と考え続けるなかで、事柄をいったん言葉以前の世界へと還元し、既存の価値付けを取り払ったあとに、それでも繰り返し喚起される独自のイメージを言葉に託して彩っていくというやり方。
- ② 言葉にしがたい心象を言い表すために、言葉と言葉のあいだにある協力関係をいったん断ち切り、直接的には説明しがたいイメージが個別的に浮かび上がるように、最小限の言葉を使用し表現していくというやり方。
- ③ 沈黙を余儀なくされる過酷な状況下にあっても自らの言葉を見失うことなく、事態を現在の問題として繰り返し検討し、その本質を数少ない言葉で的確に言い表して、具体的なイメージを喚起させるというやり方。
- ④ 耐えがたいものを語ろうとしつつ、言葉にするのをためらう思いとのせめぎ合いにおいて、自らに課した沈黙のなかにあっても、打ち消しがたく立ち現れるイメージの凝縮した言葉との出会いを重ねていくというやり方。
- ⑤ 詩として表現しようと思いついてもすぐには言葉にするまいと自己抑制し、言葉がイメージに結晶するのを待ち、他者に伝えるイメージにまで熟したと感じられたときに、思いに任せて一気に表現していくというやり方。

結果分析

第2問は、蜂飼耳が石原吉郎の詩作について述べた文章(【文章Ⅰ】)と石原吉郎が自らの詩について述べた文章(【文章Ⅱ】)から出題されました。問4は、【文章Ⅰ】に引かれた傍線部について、詩に対する石原吉郎の作法を【文章Ⅱ】の内容も踏まえて説明する設問で、二つの文章を関連づけて、抽象度の高い内容をとらえることが求められました。

指導のご提案

共通テストでは、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた複数の題材による出題が見込まれます。複数の文章を関連づけて考える問題では、それぞれの文章の内容での共通点・相違点をきちんとおさえながら読み、核心となる内容をとらえていく力をつける必要があります。限られた時間で多くの情報を処理できるよう、文章の要旨を素早くとらえることも求められます。